



* 0050274000 *

0050274-000

特208-773

標準国文問題

中等教育研究会・編

目黒書店

昭和9

AHJ

特208

773

標

國

文

問

題

中等教育研究会編

總括補充用

目黒書店

特 208

773

標準國文問題

總括補充用

中等教育研究會編

店書黑目

特208
773

中等教育研究會編

標準國文問題



東京 目黑書店發行

はしがき

一 本書は中學校、高等女學校の上級并に補習科用として編纂したものである。

一 材料は、近古文及び近世文より、練習問題として最も適當と認めたるものを選択した。

一 材料はすべて百四十五問題、これを次の三種に分類配列した。

(一) 文法的解釋問題

(二) 修辭的解釋問題

(三) 要語解釋問題

古文解釋上、右の三點は、如何なる問題に對するも必須の着眼點と考へたからである。

一 文法的解釋問題は、主として助動詞・助詞の職能を明かにし、これによりて解釋の正確を期せしめんとする意圖である。

一 修辭的解釋問題は、専ら縁語・懸詞・枕詞・序詞の四種についてその理解を得しめむことを期した。要は、これらの修辭的表現を解釋上如何に處理すべきかを會得せしめんとするにある。

一 要語解釋問題は、古文要語の正確なる理解を基底として全文の確把を目的とするものであるが、文法的修辭的解釋問題に於てもこれが正確を期すべきは勿論であると同様に、要語解釋問題に於ては、既習の文法的修辭的解釋の要領をこゝに應用せしめんとする方針である。

一 卷末に要語索引を附した。學習上の便を考慮した結果である。十分に利用せられむことを望む。

昭和九年三月

編者しるす

標準國文問題 目次

一	旅路の日記は……………	一	古の代々の帝は……………
二	めかり鹽やくあま……………	二	秋もやふけゆく……………
三	こよひ雨いたくふり……………	三	道のつらの小田どもに……………
四	世の諺に……………	四	牛に汗し棟木にみつる……………
五	道々のふみのことわり……………	五	世の中にその頃……………
六	くれ行く野末に……………	六	人の心は……………
七	人のことわざ……………	七	今の世にして……………
八	菊の花のさかり……………	八	あがれる世に……………
九	ふと或人……………	九	大かた此の里は……………
一〇	今は昔貫之が……………	一〇	人目なげなる……………
一一	人は心の底つよくて……………	一一	今一つはしを下りて……………
一二	隠岐の小島には……………	一二	うら／＼と明くる朝より……………
一三	人はかたちありさまの……………	一三	よろづの事は……………
一四	古歌によめる名所……………	一四	水難のこと／＼とたゞくに……………
		一五	生ける時むつまじからぬを……………
		一六	年月うとかりし人……………
		一七	小松の内府が……………
		一八	孝養の心なきものも……………
		一九	こよひは十月十日……………
		二〇	

三四	しなかたちこそ	三三
三五	昔びとの	三四
三六	人々より會ひて	三四
三七	代々の賢き人々も	三五
三八	清少納言の枕草子に	三六
三九	さきのほまれ	三六
四〇	學びたるが	三七
四一	君もし愚なりとも	三六
四二	凡そ人にむかひて	三六
四三	あはれ世に立ち交る	三六
四四	宣長春山の	三九
四五	人のならひにて	三〇

二 修辭的解釋問題

四六	みなかみ澄みて	三三
四七	同じ帝吉野へ	三三
四八	花咲き實なりし木も	三三
四九	おほよそうつしみの世に	三四
五〇	かきかぞふ四つの時	三五

三 要語解釋問題

五一	夏になりて	三六
五二	つたなき身を	三六
五三	くやくしく過ぎし	三七
五四	いでやすみ上る光の	三八
五五	あら玉の年を	三六

五六	たかきみじかき	四〇
五七	今日は彼方に勝ち誇り	四〇
五八	實めきたるいつはり	四一
五九	正儀もとより情ある人	四一
六〇	この所は	四二
六一	雁はひとつく	四三
六二	門出したらん日	四三
六三	火は爐邊に春をまねき	四四
六四	人の語り出でたる	四四
六五	口に養ひ	四五
六六	初學のほどは	四六
六七	竹を好み	四六

六八	昔の人も	四七
六九	山にもあれ	四七
七〇	四つの時のついで	四八
七一	言語は君子の樞機	四九
七二	さかりの花も	四九
七三	わが師は	五〇
七四	富貴の家の子	五〇
七五	菊は百花におくれ	五一
七六	かたちうるはしく	五一
七七	稚き子の	五二
七八	天地の間に	五三
七九	やゝ夕暮近くなり	五三
八〇	鶯は聲めづらしき	五四
八一	たなひぢに	五五
八二	悔しかりしは	五六
八三	櫻の花ざかりに	五六
八四	白河鳥羽の御代の頃より	五七
八五	立待居待して見る月	五八
八六	雪のふりたるに	五八

八七	もろこしに許由といひつる	五九
八八	はるく来ては	六〇
八九	さしたる事なくて	六〇
九〇	京の中	六一
九一	西行法師が	六一
九二	わかう侍りけるほど	六二
九三	大方泰時心正しく	六三
九四	野中のしみづ	六三
九五	寺院の號	六四
九六	されど近き世に	六五
九七	すべて新なる説を	六五
九八	二つにて父御門に	六六
九九	いづれの國にても	六七
一〇〇	あはれ都に	六八
一〇一	そもくうしの御しわざを	六八
一〇二	夕つけゆくまゝに	六九
一〇三	折りかこふ柴の籬も	六九
一〇四	けふはその事を	七〇
一〇五	家にありたき木は	七一

一〇六	あがたゐの翁の教を……………	七三
一〇七	風は野分こそ……………	七三
一〇八	武則公助といふ隨身父子……………	七三
一〇九	歌の道の……………	七三
一一〇	まづとよたひらかに……………	七三
一一一	人々にとへば……………	七三
一一二	朝夕へだてなく……………	七三
一一三	既に東の武士ども……………	七三
一一四	つぎさまの人は……………	七三
一一五	齢の賀に……………	七三
一一六	貌姑射の山の……………	七三
一一七	すべての習ひとして……………	七三
一一八	たとひかつがつ……………	七三
一一九	千里をへだて侍れど……………	七三
一二〇	梅は……………	七三
一二一	近衛院に譲りましし後も……………	七三
一二二	誰やの軒に……………	七三
一二三	かくてなほおはしませば……………	七三
一二四	多くのたくみの……………	七三

一二五	人は未だ聞き及ばぬ……………	八五
一二六	大かたは知りたりとも……………	八六
一二七	人の心を得るには……………	八七
一二八	昔壁の中より……………	八七
一二九	頃はみ冬たつはじめの……………	八八
一三〇	君はわれに……………	八九
一三一	元より金張七葉の……………	九〇
一三二	手かくわざは……………	九〇
一三三	すべて四つの時……………	九一
一三四	おのが歌をしも……………	九二
一三五	今やうの事ども……………	九二
一三六	かのやんどとなき……………	九三
一三七	こゝに紅の梅を……………	九四
一三八	この千五百番の歌合……………	九四
一三九	世にかゝづらふ……………	九六
一四〇	海づらよりは……………	九六
一四一	かの島には……………	九七
一四二	葉月長月は……………	九八
一四三	市に隠る……………	九九
一四四	このおはします所は……………	九九
一四五	権中納言公雄……………	一〇〇

目次 終

補充括 標準國文問題

一 文法的解釋問題

一 次ノ文ノ「つと」 「ゆめり」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

旅路の日記は、後にとうでて見るに、其の折のことどもの目の前に浮びきつゝ、いみじう心慰むわざにて、年老いて後などは、ことに昔偲ぶるくさはひなるを、それとり見る人はた心をやりて、うらやましくもをかしくも覺ゆめり。(楳園文集)

〔要語〕 ○とうで ○くさはひ ○はた ○心をやり

二 次ノ文ニ於ケルニツノ「なむ」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

めかり鹽やくあまならねど、いとなき世のなりはひにかゝづらひて、いぶせき苦屋の中に年をへつゝ、をり／＼人の物語るにつけても、都の有様ゆかしく、又ふるごとに見ならひたる野山のすがたも、いつしかいかでと思ひわたりつるに、年頃むつびかはす人の、とみに物することあり、もろともに出でたちなむやと誘ひつるまゝになむ。(關の驛)

〔要語〕

○めかり

○いとなき

○なりはひ

○かゝづらひ

○ゆかしく

○とみに

三 次ノ文ニ於ケルニツノ「なむ」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

こよひ雨いたくふり風はげしきに故郷のそらはさしおかれてまづ花の梢やいかなるらんと吉野の山のみよひとよやすからず思ひやられていとゞめもあはぬに此の宿のあるじにやあらんよなかにおき出でてさ

もいみじき雨風かなかくて明日はかならずはれなむとぞいふなるき、
ふせりていかでさもあらなむとねんじをり (菅笠日記)

〔要語〕

○よひとよ

○いとゞ

○さもいみじき

○ねんじ

四 「だに」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

世の諺に、萬能よりも一心といへり。實にも人はたゞ心にて、心はたとへば幹木のごとく、つけそへたる才は枝葉の如し。この幹木だになほからば、枝葉はいささかなのめなりとも、それを以て幹木のきずにはなしがたかるべし。されば古き歌にも、

なほき木にまがれる枝もあるものを毛を吹ききずをいふがわりなき。(待問雜記)

〔要語〕

○なのめ

○わりなき

五 「きへ」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

道々のふみのことわり説く人はあながちにも其の旨深からむとてはと
さまかうさまにもてつけていひしろふほどにはてはてはもとつ心にも
あらぬ私ごとをさへとりはやすなり (藤篋冊子)

〔要語〕

○あながちにも

○とさまかうさまに

○もてつけて

○いひしろふ

○とりはやす

六 「ものから」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

くれ行く野末にいと木ぐらう見えたる一むらは神のみ社にやと思ふに
木の間にはほのめく火のひかりしめ引きはへたるみづがきのさまなどた
どくしきものからいとかうくしく見えわたるに畦の細道たどり行
きて鳥居のもとに至れば奥の方より年老いたる翁の腰かゞまりたるが

とうろ引きさげて出で来るは御前の事どもせしなるべし (楳園文集)

〔要語〕

○引きはへ

○みづがき

○たどくしき

○とうろ

七 「や」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

人のことわざ多かる中にしなわかるゝものは手かくわざになむありけ
る。そがなかに、先づうち見てけじめいちじるきものは、ゆきかひぶみの
書きざまなりけり。はかなき筆のすさみに、あやしくもあてにもいやし
くも見ゆるものにしあれば、いとつゝましきわざなりや。(琴後集)

〔要語〕

○ことわざ

○しな

○手かく

○うち見て

○けぢめ

○いちじるき

○ゆきか

ひぶみ

○はかなき

○すさみ

○あて

○つゝましき

八 「やは」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

菊の花の盛り久しきも朝顔の夕かげまたぬもおくれ先だつしばしのほ

どの事にて枯れゆく惜しきは同じきが如く命長かりし人とてもさらぬ
別れのおろかならむやは(松屋文集)

〔要語〕 ○さらぬ別れ ○おろか

九 「か」「ま」「く」「や」「フ」文法的説明及ビ部分解釋。

ふと或人、ふる里出でて今日は幾日ぞと云ふに早うとをはたといふも餘
れるに、今更に驚かれて(三)すゞろなることにもあるか。人は如何におよび
を折りて待ち給ふらんものと思へば、俄に立歸らまくなりぬれど母のぐ
し給ふにはよろづおだしくて、なほ(五)またやこんなどぞ思ふ。
(伊香保の道行きぶり)

〔要語〕 ○すゞろなる ○および ○ぐし ○おだしく

一〇 「か」「は」「は」「や」「フ」文法的説明及ビ部分解釋。

今は昔貫之が土佐守になりて下りてありける程に任はての年七つ八つ
ばかりの子のえもいはずをかしげなるを限なく(三)かなしうしけるがとか
く煩ひて失せにければ泣きまどひてやまひつくばかり思ひこがる、程
に月比になりぬればかくてのみあるべき事かはのぼりなむと思ふにち
ごのこゝにて何とありしはやなど思ひ出でられていみじう悲しかりけ
れば柱に書きつけける

都へと思ふにつけて悲しきはかへらぬ人のあればなりけり

(宇治拾遺物語)

〔註〕 ○貫之。 紀貫之。 古今集の撰者の一人。 土佐の國司となる。

〔要語〕 ○えもいはず ○をかしげ ○かなしうしける ○いみじう

一一 「ぞかし」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

人は心の底つよくて、うはべは物やはらかに、大方のことはおのが立てたる趣ありても、あらはにけやけく人と争はず、思ひのどめてやう／＼にもすべくなくむ。かく心得て、こゝの學びに孔子の教をとりそへてもものしたらむには、つゆの難なく、我が身のためは更にもいはず、世の爲にもなることぞかし。(松の落葉)

〔要語〕 ○趣 ○けやけく ○思ひのどめて ○やう／＼に ○ものす ○更にもいはず

一二 「てん」がてら」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

隱岐の小島には、月日ふるまゝに、いと忍びがたう思さるゝことのみぞ數添ひける。いかばかりのおこたりにてかゝる憂目を見るらんと、前の世のみつらく思し知らるゝにも、いかでその事をも報いてんと、思して、打絶

えて御いもひにて朝夕勤め行はせ給ふ。法のしるしを試みがてらとかつは思すなるべし。みづから護摩なども焚かせ給ふに、いと頼もしき御事、夢にも現にも多くなんありける。(増鏡)

〔要語〕 ○おこたり ○いかで……てん ○いもひ ○かつは

一三 「まほし」らるゝ」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

人はかたちありさまの優れたらむこそあらまほしかるべけれものうちいひたる聞きにくからず愛敬ありて言葉多からぬこそあかすむかはまほしけれめでたしと見る人の心劣りせらるゝ、本性見えむこそ口惜しかるべけれ。(徒然草)

〔要語〕 ○かたち ○あいぎやう ○めでたし ○心劣りせらるゝ ○見えむ

一四 「けん」文法的説明及ビ全文通釋。

古歌によめる名所といふもの今も其のまゝにてかはる事なきはいとめでたくあらぬさまになりはてたるも又古したはしくあはれなるものになむ今は名のみにて何國なりけんとも知られぬはいと口惜しきものからこゝならんとおし考へてあかしとすべきもの見出したるなどもいとをかし (雉岡隨筆)

〔要語〕 ○あらぬさま ○あかし ○をかし

一五 「給ひ」奉れ「侍れ」文法的説明及ビ全文通釋。

古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして、御軍に立たせ給ひし、其の御歌を読み見奉れば、たけく直々しく調もいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや歌よまむとては、ますらをの心を取りかくし、あてになよびかにの

み詠みいでまくするこそ、この道のいみじきわづらひなれ。君がさとく猛き御心のまゝに打詠ませ給はむには、今の世の人誰かは並びあへ奉らむ。 藤篋册子)

〔要語〕 ○いでや ○あてに ○なよびか ○まく

一六 「まゐらす」文法的説明及ビ部分解釋。

秋もや、ふけゆくものから、なほ土さへさけぬべき暑さを、いかに物し給ふらんとうしろめたかりつるに、御消息を得ておちあはべりぬ。一日まうのぼりしふしは、何くれとあるじし給ひしぞかたじけなき。出立もいと近づきぬ。今更に別れまゐらす悲しさを思へば、何しに世にことはなれむつれまつりけんとなかくになむ。(文反古)

〔要語〕 ○ものから ○うしろめたかりつるに ○おちあ ○まうのぼり ○ふし ○何くれ

○あるじ ○なかくくに

一七 「まし」ノ文法的説明及ビ部分解釋。

道のつらの小田どもに蛙の聲々鳴くも、何となくあはれに聞きなざる、
を、こは雨を呼ぶなりなど、供なる人のいふを聞くには、憎くなりぬ。やが
て降りくれば、さればよといふ。何のたけきわざかは。よきさがいひ合
せたらんをりは、いかばかり誇りかならましなど、人々苦しきものから笑
ふ。(伊香保の道行きぶり)

〔要語〕

○道のつら

○やがて

○よきさが

一八

「ましかば」ノ文法的説明及ビ部分解釋。

牛^(三)に汗し棟木にみつるばかりなりとも、心^(三)のみやび所せくして、つみおけ

る言の葉數少なからんをば、いかでふみに富める人とはいはむ。よしや

一厨子にをさめ足らぬ程なりとも、腹^(三)にこめたる言の葉つきざらましか

ば、千卷五百卷ゆたかなるあるじとこそいはめ。(花月草紙)

〔註〕・○牛に汗し

〔其爲書、處則充棟宇、出則汗牛馬〕(柳宗元)

〔要語〕

○所せく

一九

「ね」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

世の中にその頃人のもてあつかひぐさにいひあへることいろふべきに
はあらぬ人のよくあないしりて人にも語り聞かせ問ひ聞きたるこそう
けられね|ことにかたほとりなるひじり法師などぞ世の人の上はわが如
く尋ね聞きいかでかばかりは知りけむとおぼゆるまでぞいひちらすめ
る。(徒然草)

〔要語〕

○もてあつかひぐさ

○いろふ

○あない

○うけられね

○かたほとり

二〇 「ならめや」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

人の心は、うれしきことはさしも深くはおぼえぬものにて、たと心はかなはぬことぞ深く身にしみてはおぼゆるわざなれば、すべてうれしきをよめる歌には心深きは少くて、心になはぬすぢを悲しみうれへたるにあはれなるは多きぞかし。さりとしてわびしく悲しきをみやびたりとて願はんは、人のまことの心ならめや。(玉かつま)

〔要語〕

○すぢ

○わびしく

○みやびたり

二一 「たらむ」なめれ」ノ文法的説明及ビ通釋。

今の世にして古のあとのみ守りたらむにはよろづにわたしてひろくか

きなしがたくなか／＼にこちなきやうにも見ゆべければそのおもむきにより今にかなへてさま／＼心しらひすべきわざなめれどそれはた古の高き心をばおふなく、失はぬやうにあらまほしきわざにこそありけれ。(楳園文集)

〔要語〕

○なかく／＼に

○こちなき

○おもむき

○心しらひ

○はた

○おふなく

二二 「あなる」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

あがれる世にその名聞えし筆の跡まれ／＼おちとゞまれるがあなるをいかばかり目驚くものならんと思ひたるに何の事もなくまめやかなるものなればはえなき心地するを二度見ればいとおもしろく覚え三度見ればいよ／＼味出できたりいと大きく見えていとも尊くいひ知らぬ句加はりぬかくて見る度毎に尊さいやまさりあくよなくおぼゆ(天朝盛談)

〔要語〕 ○あがれる ○まめやかなる ○はえ ○あくよなく

二三 「あんめれ」フ文法的説明及ビ全文通釋。

大かた此の里はかの水分みくまりの峯より片下りにつゞきて細き尾の上になん
あんめれば左右に立ちなみたる民の家居どもも前よりこそさりげなく
たゞ世の常の屋のさまに見入れらるれ後は皆谷より作りあげて三階の
屋になんありければいづれの家も見わたしの景色よし (菅笠日記)

〔要語〕 ○片下り ○尾の上 ○さりげなく

二四 「な……そ」「あめる」「にけむ」フ文法的説明及ビ部分解釋。

人目（三）なげなる垣（三）ほの櫻（三）の、わび顔（三）にうつろふがをかしうてまもりゐたる
を、主とおぼしき人の、手なふれそといふべき氣色してあめるを、を（三）こにな

りて、

惜（四）しむともたゝむ嵐はいかにせむ散る花ごとに手をやさへまし
とひとりごつも、何時の程にか道行き人の心にはなりにけむ。

(伊香保の道行きぶり)

〔要語〕 ○わび顔 ○うつろふ ○まもり ○をこ ○さへまし ○ひとりごつ

二五 「しも」「あんなれ」フ文法的説明及ビ全文通釋。

今一つはしを下りて又下なる屋は、床などもなくて、たゞ土の上に物うち
置きなど、みだりがはしくむつかしきに、湯あむる所（三）廁などは、そこにしも
あんなれば、日ひとひ歩き困じたる旅人の足は、八重山越え行く心地して
此の階ども上り下るなん、いと苦しかりける。されど所のさまのいひし
らず面白きには、さる事は物のかずならず。(菅笠日記)

〔要語〕 ○みだりがはしく ○むつかしき

二六 「しもよ」文法的説明及ビ全文通釋。

うら／＼と明くる朝よりしもよ物のけはひあらたまりて大路もはるかにかすむものから清う見わたさるゝにふりはへつゝ行きかふめる袂どもものとり／＼になまめかしうおぼえてまづこそ野べの遊びはゆかしけれ (伊香保の道行きぶり)

〔要語〕 ○けはひ ○ふりはへ ○ゆかしけれ

二七 「もがな」文法的説明及ビ全文通釋。

よろづの事は始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるがいと心深う春みたるやう

にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴しらかしなどのぬれたるやうなる葉の上いきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。(徒然草)

〔要語〕 ○望月 ○待ち出で ○又なく ○あはれなり ○心あらむ友

二八 「しがな」文法的説明及ビ全文通釋。

水雞のこと／＼とた／＼にもよほされておのれもやゝと人よびて酒あたた、めよなどいへばやがてもてきたれどもさるべきさかなもなければかゝるつれ／＼をまぎらはすべき物もえてしがなとおもふ心のふとうかびたるは貪る心のおこりけるよといとをかし (閑田文章)

〔要語〕 ○もよほされ ○やゝ ○やがて ○さるべき ○つれ／＼ ○をかし

二九 「ぬべき」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

生ける時むつまじからぬをだになくてぞ人はとしのばるゝ習ひまして父の如く子の如く手の如く足の如く年頃いひなれむかひたる佛の愁の袂にむすぼほれて枕もうきぬべきばかりなり筆をとりておもひを述べんとすれば才拙く言はんとすれば胸ふたがりてたゞおしまづきにかゝりて夕の雲に向ふのみ。(風俗文選)

〔註〕

○なくてぞ云々「あるときはありのすきびにくかりき、なくてぞ人はこひしかりける」(河海抄引歌)

〔要語〕

○むすぼほれ ○おしまづき

三〇 「つべき」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

年月うとかりし人のもとより度々おとづれすれど聞えぬはいかにぞやうらみつべきものぞといひおこせしに

なか／＼にわが怠りをしるべにてうれしき人の心をぞ見し

といひしかば心とけぬとなむ又のたよりにいひこししなり (藤葉冊子)

〔要語〕

○うとかり

○聞え

○なか／＼に

○しるべ

○心とけぬ

三一 とゞめつべきをノ「を」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

小松の内府が平氏の衰へ行くを見んよりはとて、早くこの世去りてむと願ひきとかかいたれどなほながらへて平氏のならんはてをも見、力の及ぶたけは過を救ひて諫めとゞめつべきを、はやくこの世去らんと思ひしは、げにうすき心なるべし。例の浮屠氏のとよりいひたることなるべし。(花月草紙)

〔要語〕

○ならんはて

○うすき心

○浮屠氏のと

三二 するすみなるが「が」文法的説明及び全文通釋。

孝養の心なきものも子もちてこそ親の志は思ひ知らるれ世をすてたる人のよろづにするすみなるがなべてほだし多かる人のよろづにへつらひ望ふかきを見てむげに思ひくたすはひがごとなりその人の心になりて思へばまことにかなしからむ親のため妻子のためには恥をも忘れ盜をもしつべき事なりされば盜人をいましめひがごとをのみ罪せむよりは世の人の飢ゑ寒からぬやうに世をば行はまほしきなり (徒然草)

〔要語〕

○するすみ

○ほだし

○むげに

○思ひくたす

○ひがごと

○かなしからむ

三三 「にや」「しか」文法的説明及び部分解釋。

こよひは十月十日、土山といふうまやになん宿りける。うひ立のけにやいたく疲れて足のうら動かれず。風の心地さへみだりがはしうて、とば

かりうつ伏しゐたるほどに、母なる人の面影夢にはあらでふと見え給へる、何ばかり日數ふべき別路にもあらねど、心にかなふものにしあらねば、立出でんとせし曉には、たゞならずこそ思ほしげなりしか。今宵の宿りを思ひおこせ給ふらんかしと悲し。(關の驛)

〔要語〕

○うまや

○うひ立のけ

○みだりがはしう

○とばかり

○思ひおこせ

三四 「たらめ」文法的説明及び全文通釋。

しなかたちこそ生れつきたらめ心はなか賢きより賢きにもうつさばうつらざらむかたち心さまよき人もざえなくなりぬればしなくだり顔にくさげなる人にもたちまちりてかけずけおさるゝこそほいなきわざなれ (徒然草)

〔要語〕

○しな

○かたち

○ざえ

○なくなりぬれば

○かけず

○けおさるゝ

○ほいなき

三五 「リしに」にたる」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

昔びとの茶の湯にすけるは、事そぎ物おろそかなるを好めりしに、今の世には得がたき品を求め、價なきくさはひを争ふ事とぞなりにたる。さるはもとしづけき心を養ひ、世の塵をのがるべきわざなるを、今は時にきそひ人にてらひて、よろづほこらしげなるは、人の心のうつろひゆくこと、すべて世のならばしとはいへど、うたてあるわざとなりたり。(琴後集)

- 〔要語〕 ○すける ○事そぎ ○くさはひ ○さるは ○ほこらしげ ○うつろひ ○うたてある

三六 「にき」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

人々より合ひてさるべきあそびなどせんにはたとひ身にとりて安から

ず口をしき事にあひたりともかまへてその日のさはりあらせじと計らふべきなりその人のありてしかくの折の事さめにきといはるゝ口惜しき事なり (十訓抄)

- 〔要語〕 ○さるべき ○かまへて ○さめ

三七 「せば」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

代々の賢き人々も、古里は忘れがたきものにおぼえ侍るよし、我今は初めの老も四とせを過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齡かたぶきて侍るも見すてがたく、初冬の空のうちしぐるゝ頃より、雲をかさね霜をへて、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しく思ふことのみあまたあり。(芭蕉翁文集)

- 〔要語〕 ○初めの老 ○はらから ○いまそかり

三八 「ぬめり」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

清少納言の枕の草子に、過ぎにし方こひしきものとして、折からあはれなりし人の文、雨などの降りてつれづれなる日さがし出でたるといへる如くとありしかゝりしと思ひ出でられては、涙もさしぐまれぬめり。知らぬ昔の人にて、其の姿さへ見ゆるやうに思はるゝものぞかし。(天朝墨談)

〔要語〕 ○つれづれ ○とありし ○さしぐまれ

三九 「ず」ト「じ」下ノ文法上ノ區別及ビ全文通釋。

さきのほまれ、のちのそしりもあなわづらはし。たゞ生れたるほどく、に、寒からず欲しからずば、人の國ふる里のけぢめもあらじ。かの谷深き處の有様いきて見るとも、住まであはれを知らむやは。住みて都のわび

しきは、身の程のまづしきなり。(藤篋冊子)

〔註〕 ○すまであはれを 「山深くさこそ心はかよふとも住まであはれは知らむものかは」(新古今集)

〔要語〕 ○あなわづらはし ○けぢめ ○わびしき

四〇 次ノ文ノ「まじき」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

學びたるがなか／＼に知らぬよりはあしきこともありおのがもの知れる程を見え知られんとしてかりそめの言葉にも人のえ聞き知るまじきことをいひおもちけしきほこりに人をばおとしめなどすこはなまものしりの上にあることにていといたにくげなりかし。(松の落葉)

〔要語〕 ○なか／＼に ○見え知られ ○おもち ○けしき ○ほこりか ○おとしめ

四一 次ノ文ノ「まじき」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

君もし愚なりとも賢臣相輔けばその國亂るべからず親もし驕れりとも孝子慎みてしたがはばその家全かるべし重き物なれども舟に載せつれば沈まざるが如し上下はかはれども程々につけてたのめし人のためにはゆめ／＼うしろめたなく腹黒き心のあるまじきなりかくれにては又冥加を思ふべきゆゑなり (十訓抄)

〔要語〕

○たのめし人

○うしろめたなく

○かくれ

○冥加

四二

「まじかる」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

凡そ人にむかひて其の人のあしきことを言はんほど心苦しきものなかりつるにそれを包みあへずしていふほどの厚きまこともあるまじかるをその志をも思ひやらであしく聞きなすらむはあぢきなき心なり

(待問雜記)

〔要語〕

○心苦しき

○あぢきなき

四三

「ごと」ノ文法的説明及ビ全文通解。

あはれ世に立ち交るべき身は、其のほど／＼につけて、智といふものあらまほしき。そも習ひもてつけたらむが、己が性のごとなれるは、いともかたしかし。常にはかど／＼しくうちふるまへるも、いでや事にさしあたりては、我が心から頼もしからぬよ。父母のたまものならぬをいかにせむ。(藤篋册子)

〔要語〕

○習ひもてつけ

○ごと

○かど／＼しく

○いでや

四四

「けらく」「かも」「なも」ノ文法的説明及ビ全文通釋。

宣長、春山の櫻の花のさきのを、りを、つらく見つゝ思ひけらく、

たぐひなき花はこの花も、にちに花はさけども花はこの花
 うらぐはしきかも、たふときかも。あだし本草の花のごと、けやけくこち
 たくはあらず、浅らかにおぼゆるものから、たぐひなきにほひをもた
 りて、またなくみやびたることの、言ひもかね名づけもしらぬは、この花に
 なもありける。(鈴屋集)

〔要語〕

○さきのをより

○うらぐはし

○あだし

○けやけく

○こちたく

○もたリ

四五

「らめ」ずらん」文法的説明及全文通釋。

人のならひにて思ひ立ちたる事を諫むるは心づきなくていひかはす人
 は心になふやうにも覺ゆれば天道はあはれとも思すらめど主人の悪
 しき事を諫むるものは願を蒙る事ありがたしさてする事の悪しき様に
 もなりて靜に思ひ出づる時はその人のよく言ひつるものをと思ひ合は

すれども又心の引く方につきて思ひたる事のある時はむつかしく又諫
 めんずらんとてこの事を聞かせじと思ふなりこれはいと愚なる事なれ
 ども皆人の習なればはらくろからず又心づきなからぬ程にはからふべ
 きなり (十訓抄)

〔要語〕

○心づきなく

○ありがたし

○むつかしく

○はらくろからず

二 修辭的解釋問題

四六 「年なみをわたり」ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

みなかみ澄みて流るゝ川も落ち行く末となりてはやうやうあらぬ塵あ
くたにけがれて遂に本の清き姿を失ふことあり詞の道も又かくの如し
あがれる世のみやびかなりし手ぶりもあまたの年なみをわたりてはい
つしかとさとびたる習はしこそ多くは出で來にたれ (琴後集)

〔要語〕

- みなかみ
- やうやう
- あらぬ
- あくた
- 詞の道
- あがれる世
- みやびか
- 手ぶり
- さとびたる

四七

次ノ文ノ「しら雲」みよし野」ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

同じ帝吉野へ移らせ給ひける又の年の春正月の末つ方吉水の法印に賜
はせ給ひける御歌

みよし野の山の山守こととはむ今いくかありて花は咲きなむ
と遊ばされし御かへしに

花咲かむ頃はいつともしら雲のあるをしるべにみよし野の山
と勅答申されけり (吉野拾遺)

〔註〕

○同じ帝 後醍醐天皇。 ○又の年 延元三年 ○吉水の法印 宗信尊壽丸父吉水修行

〔要語〕

- 又の年
- こととはむ
- しるべ

四八

「木の芽はる雨」ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がれ木の芽はる雨も時雨にかはり、
それも何時しか染めぬべきものなくなりぬればみぞれにうつりて雪と

積もる。一とせの月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪のうなゐ子が、おとなしくなりぬといはれしなむ、やがて老の始にて、終に髭髪白くなりぬ。(閑田文章)

〔要語〕 ○振分髪のうなゐ子 ○おとなしく

四九 「うつつしみの」ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

おほよそうつつしみの世にありとある人、折にふれ事に遇ひて、心に思ふことあらざるはなし。其の思ふことひたぶるなる時は、あながちに心につみもてあらむことを得ず、その心につゝみ得ぬときは、かならず聲にたててなげく。そのなげくにつけては、やがてことに出でてうたふ。そのうたふ時は、詞にあやあり、心にことわりあり。これをしも歌とはいふなり。(琴後集)

〔要語〕 ○ひたぶるなる ○あながちに ○なげく ○やがて ○ことに出でて ○あや

○ことわり

五〇 「かきかぞふ」久方の」ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

かきかぞふ四つの時はゆけれど春にしく時もなくかゞなべて十まり二つの月は立てれど彌生にくらぶる月もあらずなむありけるかくしも年にまれなる彌生の空にして、久方の光うらゝにしなとの風なごき春の心よりなり出でてにはひ榮ゆる櫻の花なむちゝの花にすぐれたるはうべならずや (賀茂翁家集)

〔要語〕 ○かゞなべて ○彌生 ○しなとの風 ○なごき ○なり出で

五一 「葛の葉の」ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

夏になりて、蒼蒼の軒端に五月雨の雫いと所せきも、御覽じ馴れぬ御心地に、様かはりて珍しく思さる。

あやめふく萱が軒端に風過ぎて、しどろに落つる村雨のつゆ。

初秋風の立ちて、世の中いと物悲しく露けさまさるに、いはむ方なく思し亂る。

ふるさとを別路に生ふる葛の葉の、秋は來れどもかへる世もなし。

〔要語〕 ○所せき ○しどろ ○いとゞ

五二 「藻鹽草」梓弓ノ修辭的説明及ビ全文通釋。

つたなき身を顧みるに秋の螢の光を聚めずして風月の望に暗く春の鶯の囀を學ばざれば絲竹の曲に疎し藝なく能かけたり爲す事なくして徒らに數多の露霜を送るばかりなりかゝるにつけては藻鹽草かきあやま

れる言の葉も數つもり梓弓引き見ん人の嘲もはづれ難く覺えながら志の之く所たゞにはいかゞやまんとてならし (十調抄)

〔要語〕 ○つたなき ○絲竹 ○ならし

五三 「海士のたく繩」玉くしげノ修辭的説明及ビ全文通釋。

くやしく過ぎし昔の事はすべきやうなし。いくばくならぬ齡なれば、今より後一日も早く日月を惜み先のひがごとを悔いて、飛彈匠うつ墨繩にあらねども、只一筋に善を好み、道を樂しみて過さんこそ、この世に生けるかひあるべけれ。年老いては同じことするならひなれば、海士のたく繩くりかへしかくいひくして、玉くしげあけくれ自ら心を戒め、又人に樂しみをすゝむる媒とするならし。(樂訓)

〔註〕 ○飛彈匠 昔飛驒の國より大工を朝廷に奉仕したるより、大工の稱となる。

〔要語〕 ○ひがごと ○ならし

五四 「浮雲」の修辭的説明及ビ全文通釋。

いでやすみ上る光の高くあらはれて人の目とゞめむにまばゆきばかりなるも時のまにあやなき霧のまよひにかきけたれてたゞやみかとはかりたどり中空にしばしありと見ゆるもやがて西になることのとゞめがたきや浮雲の定めなくてきのふは榮えけふは衰ふる世の有様こそまづおぼゆれ (琴後集)

〔要語〕 ○いでや ○あやなき ○かきけたれ

五五 「あら玉の」修辭的説明及ビ全文通釋。

あら玉の年を送り迎ふるわざこそ千年の古いまのうつゝ人もかはらぬ

喜はすなりけれ春のまうけつかさつかさの衣はかまの色あひゆほびかに新たならむがめでたし民草も己がほどほどにつけて染めぬひするめでたし貧しきは解き洗ひてうするいそぎのあはれながらそも喜する心ばへなむおろそげならずめでたしよね積みはえもちひ白づき海のもの山のもの何くれとおくりかはすあかずたのしき (藤篋冊子)

〔要語〕 ○うつゝ人 ○まうけ ○ゆほびか ○てうず ○いそぎ ○心ばへ ○おろそげ ○よね ○もちひ ○何くれと

三 要語解釋問題

五六 全文通釋。

たかきみじかきほとくりに望み願ふことのつきせぬぞ世の人の眞心にて今は足りぬとおぼゆる世はなきものなるを世には足ること知れるさまにいひてさる顔する人の多かるは例のからやうの作りごとにこそあれ (玉かつま)

〔要語〕 ○からやう

五七 全文通釋。

今日は彼方に勝ち誇りあすは又うしろを見せて追ひ討たる、よその仇

結びし始を問へば深き怨のあるにもあらずかたみに龍の雲に乗りてみ空をかけり渡らんと誇り驕れる心のなすにこそあれ (藤篋冊子)

〔要語〕 ○かたみに

五八 全文通釋。

實めきたるいつはりはいふとも偽めきたるまことないひそとはもの疑ひ深き世の人の心ぐせにかなへる教へごとなりこをなべての人うべなへど事のあとにつきて見もて行くに世には實めきたる偽より偽めきたる實なむ多かりける (橋守部家集)

〔要語〕 ○うべなへ

五九 全文通釋。

正儀もとより情ある人なりければ熊王も思ひつきて親の仇をも忘れにけるにやよく宮仕へにけり十五六程になりければ河内國にてすこしき所をしらせむと言ひけれども恥ある一矢をも射候ひてこそとて辭しにけり (吉野拾遺)

〔註〕 ○正儀 楠正儀。

〔要語〕 ○思ひつき ○しらせむ

六〇 全文通釋。

この所はかりそめながら五十年餘りの春秋をへて三よの帝の住ませ給ひし御行宮の跡なりと申すはいかゞあらん。事たがへるやうなれどをりくおはしなんどせし所にてはありぬべし。今は堂も何もあらためてそのかみの名残はあらねどなほめでたく心にくきさまこと所には似ず。(菅笠日記)

〔要語〕 ○そのかみ ○心にくき

六一 全文通釋。

雁はひとつく山こえて跡なく見はつる舟の上にて故郷の方に行きちがふ聲又つがひくならび行く中にはしたなる鳥のまじはりたるいくの網にか身を失ひけんと妻の心ぞ思ひやらるゝ (ひとりごと)

〔要語〕 ○つがひ ○はした

六二 全文通釋。

門出したらん日行く人留まる人ともにうち勇みぬれど見おくり見かへりなんどしたるは心にかなふ命ならばと相思ふほどこそわりなけれ住みなれし里の木立は行くにまかせて梢をかくし跡しら雲の八重に重な

りてはめなれし山も埋みぬれば心へだつなと思ふばかりこそかなしけれ (ひとりごと)

〔註〕 ○心へだつな 「白雲のやへにかきなるをちにも思はむ人に心へだつな」(古今集)

〔要語〕 ○わりなれけれ ○跡しら雲の

六三 全文通釋。

火は爐邊に春をまねきて窓に鶯の聲なき事をうらみひとり雨聞く聞の中には夜もすがら灰などせりてやをら心の奥をさがしあるはかまざる指を補ひては筆とりて更けゆく鐘のおもひをのぶ。(ひとりごと)

〔要語〕 ○せりり ○やをら

六四 全文通釋。

人の語り出でたる歌物語の歌のわろきこそほいなけれすこしその道知らむ人はいみじと思ひては語らじすべていとも知らぬ道の物語したるかたはらいたく聞きにくし (徒然草)

〔要語〕 ○ほいなけれ ○いみじ ○かたはらいたく

六五 全文通釋。

口に養ひ身にまとひ雨露のふせぎするこの三つばかり人にせちなるはなければこれをな求めそ忘れよとは誰かいはん。求の程よかれとなり。求の程を過ぎ及ばぬは身の病を招くなり。さあらんには何事をかしえん。口あはきにあけばおのづから程を得衣あかつかぬに止まり家身に叶へば足る。(とはず語り)

〔要語〕 ○せち ○な……そ ○あはき

六六 全文通釋。

初學のほどはいかでと思ふ心のすゝみより、宵曉につとめ勵みて、文机に向ひても、春の日を短う秋の夜を長からぬやうにのみ覺ゆるを、いさゝか物の心知りえて後はいつとなく怠りゆくならひより、書を開きては見るに物うく、筆をとりては書くに心つかれて、はては文机の上につぶしかゝるめり。(泊酒文藻)

〔要語〕 ○いかで ○すゝみ ○はては

六七 全文通釋。

竹を好みめづる菊もはちすもことわりある事にはあらぬをさまぐの
ことわりいひて才おふぞうるさきつくも虫嫌ふもげじく嫌ふも何の

ことわりあるものにはあらずなむ (花月草紙)

〔註〕 ○つくもむし むかでなるべし。不詳 ○げじく 蝸、多足類の小蟲

〔要語〕 ○めづる ○ことわり ○才おふ

六八 全文通釋。

昔の人も世にあへるあり時を失へるありそのあととも多かめるをさ
らにかぞへあげむぞわづらはしき世にあへるが賢きにもあらず時失へ
るが愚なるにもあらず身の幸のおくれさき立ちあひあはぬにこそあら
め (藤篋冊子)

〔要語〕 ○世にあへる ○時を失へる ○あと

六九 全文通釋。

山にもあれ野にもあれ浮世の外にすまひして身ひとり住みわびたらんうち見には美しけれどさるは人の常かは木よりも生れず石よりも出でずはだへにまとふ絲腹にあくよね身をおく家いづれか人に取らざるすべて人の力に待つものなり (とほず語り)

〔要語〕 ○すみわび ○うち見 ○よね

七〇 全文通釋。

四つの時のついででも花は根に鳥は古巢に歸るをはじめてみそぎにすつる夏の夕暮虫の音のかれくに尾花が袖のしほれゆくも皆あはれなるにとりて一とせのつひに暮るゝこそいはむ方もなけれ (閑田文章)

〔要語〕 ○みそぎ ○尾花が袖

七一 全文通釋。

言語は君子の樞機なりといへりあからさまにも君をないがしろにし人におごることはあるべからぬことにこそさきにも記しつる如く堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば亂臣賊子といふものはそのはじめ心詞を慎まざるより出でくるなり (神皇正統記)

〔註〕 ○言語は「言行君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也。」(易繫辭) ○堅き氷は「履霜堅氷至」

(易經)

〔要語〕 ○あからさま ○ないがしろ

七二 全文通釋。

さかりの花もやうやううつろひて青葉になれば山時鳥鳴かむとやすくいねで待ちあかし秋さりくれば月にうかれつゝ有明になりゆくをあか

ず口惜しと思へど山のは白う降りそむれば雪にまたうつろひ行くぞ人の心のならはしなる。(雄岡隨筆)

〔要語〕

○やうやう

○うつろひ

○秋さりくれば

○山のは

七三

全文通釋。

わが師は筆とられてより幾たびか稿をかへて、なほ心におちぬ程は其のまゝ、厨子のうちに巻き入れおかれて、心のおもむけるをりとうでては、消し補ひなどせられしことつねなり。されば自らゆるして清書せらるるに及びては、あやまれることはをさく／＼なかりしなり。(泊活舎筆話)

〔要語〕

○おちぬ

○おもむける

○とうで

○をさく／＼

七四

全文通釋。

富貴の家の子としてつかさかうぶり心にかなひ世の中さかりにおごりならひぬれば浮世のはかなきはぶれ遊びにのみ心をうつし學問などのしづかなるつとめにまめやかに心をよせんことはいとかたし。(文訓)

〔要語〕

○つかさ

○かうぶり

○はかなき

○まめやかに

七五

全文通釋。

菊は百花におくれてひとり晩節をたもち、霜にはこりて操の色をあらはし、なべての花に時を異にするのみならず、色、形、匂ともに殊にすぐれてあてやかなれば、此の時もし花多くともわきてあはれむべきに、秋の末にひとり盛りなれば、折にあひていとめでたし。(樂訓)

〔要語〕

○なべての

○あてやが

○わきて

○あはれむ

七六 全文通釋。

かたちうるはしく、物よくいひ、よききぬ着て賓客に對し、すがた言葉はすぐれて人のもてなしよく、そのふるまひうるはしく目たつべき程なれど、文字を知らず、古今の事にうとく、かたこと言ひて人の耳に立てば、すがた言葉のうるはしきも空しくなり、人に見おとされ、あさましく下さまに見ゆるは口惜し。(文訓)

〔要語〕 ○かたち ○かたこと ○あさましく ○下さま

七七 全文通釋。

稚き子のもよくいひよく禮などなせば、さときやうにて末頼もしきこちすれど頼みにはならぬものなり、おほかたあげまきのころほひまでもものごとおほらかにてうち見おろかしきやうなるがかへりて末頼み

あり。(待問雜記)

〔要語〕 ○あげまき ○おほらか ○うち見

七八 全文通釋。

天地の間にありとあるもの、皆おのづからにうけえたる所あり。いま唯一つ鳥の上もていはむに、本草の實をくふべきものとは、ふ虫をくふべきものと、嘴のやう異にて相通はぬあり。かれこれを共にくふべきあり。相羨むともかなふべからず。いかんともせんすべなかるべし。(爾田文章)

〔要語〕 ○ありとある ○やう異にて ○せんすべ

七九 全文通釋。

や、夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじしねぐらもとむるに、雁の一

つら二つら渡り行くなど、えもいはむ方なし。暮れはてても、なほ行く水の
とほじろくのこりて、川添小田にいはへるみくまりの神のみ火の、海人の
いさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨をぼふる隅田川、たがすみがきのすさびなるらむ。
(うけらが花)

〔註〕 ○みくまりの神 水分の神、水神様。

〔要語〕 ○おのがじ、 とほじろく ○いはへる ○いさり ○すさび

八〇 全文通釋。

鶯は聲めづらしき朝より障子にうつる日影ものどやかにおぼえきのふ
今日野山もけしきだちてとちたる水もおのづから流るゝ頃聲も共によ
くほどけて霞に伴なひ花に遊ぶ又青葉が枝にさへづる頃ぞひたすらを

しき (ひとりごと)

〔要語〕 ○のどやか ○けしきだち ○ひたすら

八一 全文通釋。

たなひちにみなわかきたりむかもゝにひちかきよせと古き書にいへる
はみとし作るわざのいたつきををかしくいひとれる言の葉になむげに
この早苗とるほどこそしづがしわざはいそがはしく苦しげに見ゆれ
(楳園文集)

〔註〕 ○たなひちに云々「手眩に水沫搔垂り向腕に泥搔寄せて取り作らん奥津御年」(祝詞祈年祭)

〔要語〕 ○みとし ○いたつき ○をかしく ○しづがしわざ

八二 全文通釋。

悔しかりしは、日頃したひたる名どころだに、或時は雨にさへられ、あるは

日うちかたぶきて泊りを急ぎかへるさには必ず立ちよらんと思ひて過ぎぬるをも、古郷の方にうち向きては一足をだに費しがたくて、また來べき折もあらむと見残したりしも、終に行くべきよすがもなく、年ふりなんどしたる後の心こそ口惜しけれ。(ひとりごと)

〔要語〕 ○名どころ ○さへられ ○よすが

八三 全文通釋。

櫻の花ざかりに歌よむ友だちこれかれかいつらねてそこかしこ見ありきけるかへるさに見し花どもの事語りつゝ來るに一人がいふやうまろは歌よまんと思ひめぐらしけるほどに今日の花はいかにありけんこまやかにも見ずなりぬといへるはをこがましきやうなれど誠は誰もさもある事とをかしくぞ聞きし (玉かつま)

〔要語〕 ○まろ ○をこがましき ○さもある ○をかしく

八四 部分解釋。

白河鳥羽の御代の頃より政道の古きすがたやうやう衰へ後白河の御時兵革(三)おこりて姦臣世をみだり天下の民ほとほと塗炭におちにき頼朝(三)一臂をふるひてその亂を平げたり王室は古きに復るまではなかりしかど九重の塵もをさまり萬民の肩もやすまりぬ上下堵を安くし東より西よりその徳に伏ししかば實朝なくなりても背く者ありとは聞えざりきこれにまさる程の徳政なくしていかでたやすく覆さるべき(六)たとひ又失はれぬべくとも民安かるまじくば上天よも與し給はじ。(神皇正統記)

〔要語〕 ○ほとほと ○塗炭 ○堵を安くし

八五 全文通釋。

立待居待して見る月はすこしかけそこなはれこそすれ待ち戀ひし夜に
いかでけおとりなむ夜はいつにまれ村雨過ぎし名残の雲にはかなくさ
し出でたらむ影に垣根の小草の露玉とちり時雨とそゝげるこそいと
いともあはれとは眺めらるれ (藤篋冊子)

〔要語〕 ○立待 ○居待 ○けおとり ○まれ ○はかなく ○玉とちり

八六 全文通釋。

雪のふりたるに小簾たるゝも口惜しければかの高嶺の雪はといひたれ
ば何となううちゑみて又立ちもやらすさがに捨ても置かであらべな
んどにあれかゝげ給へよなどほのかにいひしこそよけれいと女はか
かるべしとぞ (花月草紙)

〔註〕 ○高嶺の雪は 「香爐峰雪撥簾看」(白樂天)をさす。

〔要語〕 ○さすがに ○ほのかに

八七 全文通釋。

もろこしに許由といひつる人は、更に身にしたがへる貯もなくて、水をも
手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを人の得させた
りければ、ある時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、か
がましとてすてつ。又手にむすびてぞ、水も飲みける。いかばかり心の
うちすゝしかりけむ。(徒然草)

〔要語〕 ○さゝげ ○なりひさごと ○かしがまし ○むすび

八八 部分解釋。

はるく來ては、^(二)やどりかはらぬ空の星さへ影あはれにおぼえ、何につげ
 ても古郷の便のみおぼつかなくて、^(三)人やりならぬ道をうらむる折ふし、我
 が國人のかへるにあひては、文たのまんと筆とりたれど、待たせて時移す
 べくもあらねば、^(四)心の程あらましにも書きとりがたくて、物にもなやまで
 こゝまでは來ぬるとばかりかい認めて、^(五)やがて又別れ行くこそほいなけ
 れ。(ひとりごと)

〔要語〕

○人やりならぬ道

○やがて

○ほいなけれ

八九

全文通釋

さしたる事もなくて、人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行き
 たりとも、そのことはてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむつかし、
 人とむかひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心もしづかならず、よろづのこ

とさはりて、時をうつす。互のため益なし。いとほしげにいはむもわろ
 し。心づきなき事あらむ折は、なか／＼そのよしをもいひてむ。(徒然草)

〔要語〕

○さしたる

○がり

○むつかし

○心づきなし

九〇

全文通釋。

京の中いづこはあれど、かちよりも舟よりもたよりよき遊び所の隅田川
 に勝れる方またなければ、男女のけふを盛りとむれくるが綾をたち錦を
 つらねて立ちさまよふ袖の香のおひ風には、花もにはひをけたれつべく
 なか／＼ことざましになむ見えにける。(寄居文集)

〔要語〕

○かちより

○たより

○おひ風

○けたれ

○なか／＼

○ことざまし

九一

部分解通。

西行法師が陸奥の方に修業しけるに千載集撰ばると聞きてゆかしさに
わざとのぼりけるに識れる人行きあひにけりこの集の事ども尋ね聞き
てわが詠みたる鳴たつ澤の秋の夕暮といふ歌や入りたると尋ねけるに
さもなしといひければさてはのぼりて何かはせむとてやがて歸りにけ
り (今語物)

〔註〕 ○鳴たつ澤云々 「心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕暮」(西行)

〔要語〕 ○ゆかしさに ○わざと ○やがて

九二 全文通釋。

わかう侍りけるほどより學びの道おこたりがちに過ぎ來つる身の今は
いたづらにのみ年月をかさね侍りて世に聞ゆべからむかたかどだにあ
らぬをひがみ、にき、たがへ給ふふしありてかあまたたび問ひおとづ

れたまふなるはおもひもかけぬわざなりや (琴後集)

〔要語〕 ○かたかど ○ひがみ、 ○おとづれ

九三 全文通釋。

大方泰時心正しく政すなほにして人をはぐくみ物におごらず公家の御
事を重くし本所の煩をとめしかば風の前に塵なくして天の下すなは
ち静まりきかくて年代をかさねしことひとへに泰時が力とぞ申し傳ふ
める (神皇正統記)

〔要語〕 ○はぐくみ ○公家 ○本所の煩

九四 全文通釋。

野中のしみづふたみの浦高砂の松など名ある所々御覽じわたさるゝも、

かゝらぬ御幸ならば、をかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御み
だり心地に、御目とまらぬも、我ながらいたうくんじにけるかなとおぼさ
る。(増鏡)

〔要語〕 ○かきくらす ○いたう ○くんじ

九五 全文通釋。

寺院の號さらぬよろづのものにも名をつくること昔の人は少しも求め
ずたゞありのまゝにやすくつけけるなりこの頃は深く案じ才覺をあら
はさむとしたるやうに聞ゆるいとむつかし人の名も目なれぬ文字をつ
かむとする益なきことなり何ごともめづらしきことを求め異説を好む
は淺才の人の必ずあることなりとぞ (徒然草)

〔要語〕 ○さらぬ ○才覺 ○むつかし ○つかむ

九六 全文通釋。

近き世に道々に秘傳口訣などいふなるすぢ、おほくは道を重くすといふ
はたゞ名のみにて、まことは人に知らさずて、おのれ一人のものにして世
にほこらむとする、わたくしのきたなき心、又それよりもまさりてきたな
き心なるぞ多かる。さるたぐひも、もろもろのはかなき伎藝の道などは、
とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくはかばかしき道には、さるこ
とあるべくもあらず (玉かつま)

〔要語〕 ○すぢ ○はかなき ○とてもかくても ○はかしくしき

九七 全文通釋。

すべて新なる説を出すはいと大事なりいくたびもかへさひ思ひてよく

たしかなるよりどころをとらへいづくまでもゆきとほりてたがふ所なく動くまじきにあらずばたやすくは出すまじきわざなりその時にはうけばりてよしと思ふもほどへて後に今一たび思へばなほわろかりけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし (玉かつま)

〔要語〕

○かへきひ

○ゆきとほり

○うけばりて

○なほ

九八

部分通釋。

二つにて父御門に別れ奉り給ひしかば御面影だに覚え給はねどなほこの世の中におはすと思されしまではおのづから逢ひ見奉るやうもやなど人知れず稚き御心にかゝりて思しわたりけるに十二の御年かとよかくれさせ給ひぬと傳へ聞き給ひし後はいよく世の憂さを思しくんじつゝいとまめだちてのみおはしますを承明門院は心苦しう悲しと見奉

り給ふ。(増鏡)

〔註〕

○二つにて

後醍醐天皇をさし奉る。

○父御門

土御門上皇。

〔要語〕

○かとよ

○思しくんじ

○まめだちて

○心苦しう

九九

全文通釋。

いづれの國にてもしづ山がつといふ言はよこなまりながらも多くむかしの言をいひつたへたるを人しげくにぎはしき里などは他國人も入りまじり都の人なども事にふれてきかよひなどするほどにおのづからこゝかしこの言葉を聞きならひてはおのれもことえりしてなまさかしき今やうにうつりやすく昔まに遠くなかくいやくしうなんなりもてゆくめる (玉かつま)

〔要語〕

○しづ山がつ

○よこなまり

○ことえり

○なまさかしき

○今やう

一〇〇 全文通釋。

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里のをちに老いたるたらちねを置きまつりて、とみのことありともいかでか知らん。知るともいかでかとみに行き至らん。(賀茂翁家集)

〔要語〕

○あからさま

○年のはに

○たはやすく

○たらちね

○とみ

一〇一 全文通釋。

そもくうしの御しわざをとかくもどき侍るは、いともかしこくは侍れど、さりとして、いかにぞやおぼゆるふしをさて過ぐさんは、なかくにかの教の心にもたがひてぞ侍らまし。よろづはつぎつぎに明かになりゆかんこそ學びの道のほいには侍らめ。(鈴屋集)

〔要語〕

○うし

○もどき

○かしこく

○さて

○なかくに

○ほい

一〇二 全文通釋。

夕つけゆくまゝに風吹き出でて、うち散る露もすゞしげなるに、かたへよりすみゆく水に、月の影さへほのめきたる、えもいはすをかし。簑小笠何くれの物とりしたためつ、打連れ歸るすがたどものあやしげなるに、又もふり出づるさみだれの空に、時鳥の二聲三聲なのりたるは、しでの田長と名づけしもしるく、折さへいとをかしうなむ。(樞閣文集)

〔註〕

○しでの田長 「いくばくの田をつくればか時鳥しでの田をさを朝なくよぶ」(古今集)

〔要語〕

○夕つけゆく

○えもいはす

○したゝめ

○しでの田長

○しるく

一〇三

全文通釋。

折りかこふ柴の籬も山となりて隣をへだて竹の下道あと絶えて訪ふ人もなしあなさぶしやといふ程に世にうもるゝわびすみの心やりには酒こそよけれと妹なねが楷さしくべ甕みかのしりたき黒めてすゝむるに軒はくもれど心は少しはれぬ。 (橋守部家集)

〔要語〕 ○さぶしや ○わびずみ ○心やり ○妹なね

一〇四 部分解釋。

けふはその事をなさむと思へどあらぬいそぎまづいで来てまぎれ暮し待つ人はさはりありてた二のめぬ人は來り頼みたるかたのことはたがひ三て思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。 わづらはしかりつることはことな四くて、五やすかるべきことはいと心ぐるし。 日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。 一年のこともかくの如し。 一生の間もまたしかなり。

五かねてのあらまし、皆たがひゆくかと思ふに、おのづからたがはぬこともあればいよゝものは定め難し。 不定と心得ぬるのみ、まことにたがはず。 (徒然草)

〔要語〕 ○あらぬ ○いそぎ ○たのめぬ ○心ぐるし ○あらまし

一〇五 全文通釋。

家にありたき木は松櫻松は五葉もよし櫻はひとへなるよし八重櫻は奈良の都にのみありけるをこの頃ぞ世に多くなり侍るなる吉野の花左近の櫻みな一重にてこそあれ八重櫻はことやうのものなりいとちたたく相ちけたり植ゑずともありなむおそ櫻またすすまじ蟲のつきたるもむつかし (徒然草)

〔要語〕 ○ことやう ○ちたたく ○ありなむ ○すすまじ ○むつかし

一〇六 全文通釋。

あがたゐの翁の教をうけて、その學びの心をつぎたる人かれこれ侍れど、古言の學びに精しきことは、鈴の屋のあるじこそひとりすぐれたれ。翁の思ひ残されたるふしをも考へあきらめたるたぐひ多くて、この人出でて後、この學びの道備はりぬるはいみじきいさをにて、まことに藍よりも青しとせむこと、いへば更なり。(琴後集)

〔註〕 ○あがたゐの翁 賀茂眞淵をさす。 ○鈴の屋のあるじ 本居宣長。

〔要語〕 ○あきらめ ○いさを ○藍よりも青し ○いへば更なり

一〇七 全文通釋。

風は野分こそかなしけれながめとふりかへてはいとさうざうしき秋に

なん八月十日あまりの空の雲のまよひ人の心をなやましようするよ

(藤篋冊子)

〔要語〕 ○野分 ○かなし ○ながめ ○さうざうしき

一〇八 全文通釋。

武則公助といふ隨身父子ありけり右近馬場の賭弓わろく仕りたりとて子公助をはれたる所にて打ちけるを逃げのく事もなくて打たれければ見る人いかに逃げずしてかくは打たるゝぞといひければ若し逃げなば衰老の父追はむとせむ程にたふれなどし侍らばきはめて不便なりぬべければかくの如く心のゆくほど打たるゝなりと申しければ世の人いみじき孝子なりと言ひて世のおぼえこれよりぞ出で來にける (古今著聞集)

〔要語〕 ○隨身 ○はれたる所 ○不便 ○心のゆく ○世のおぼえ

一〇九 全文通釋。

歌の道のみいにしへにかはらぬなどいふこともあれどいさや今もよみあへる同じことば歌枕も昔の人のよめるは更に同じものにあらずやくすなほにして姿も清げにあはれも深く見ゆ梁塵秘抄の郢曲のことばこそ又あはれなることは多かめれ昔の人はいかにいひすてたることぐさも皆いみじく聞ゆるにや (徒然草)

〔註〕 ○梁塵秘抄 平安朝時代の歌謡集。

〔要語〕 ○いさや ○歌枕 ○やすくすなほ ○あはれ ○ことぐさ

一一〇 部分解釋。

まづとよ、たひらかにものし給ひてめでたき御よはひ重ねあげ給へらむ

年の始のよろこび、なほ八千世にとことほぎ申す。ここにもことなくてなむ。こぞの冬はふりはへさせ給へる御ふみよ。まだきに春や立ちかへり來ぬると、思ひ給へかけぬ鶯の初聲よりけにめづらしくうれしくなむ承りぬる。(鈴屋集)

〔要語〕 ○とよ ○給へらむ ○ことほぎ ○こぞ ○ふりはへ ○思ひ給へ ○けに

一一一 全文通釋。

人々にとへばかれにくはしきはこれにおろかにこゝに思ひ入りたるはかしこに心あさししかのみならず大和冊子の上にはくちさきらきゝたるももろこし文に向へば爪くはるるたぐひ多しまことにそれことわりたれやし人かはみながらかねそなへたるあらむ。(泊瀬文藻)

〔要語〕 ○大和冊子 ○くちさきらきゝたる ○爪くはるゝ ○たれやし人 ○みながら

一一二 全文通釋。

朝夕へだてなくなれたる人のともある時にわれに心おきひきつくるへ
るさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげ
にくしく、よき人かなとぞおぼゆるうとき人のうちとけたることなど
いひたるまたよしと思ひつきぬべし。(徒然草)

〔要語〕

○ともある時

○心おき

○ひきつくるへる

○げにくしく

○よき人

○うとき

一一三 全文通釋。

既に東の武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもい
みじう思し騒ぐ。もとよりいとけはしき山のつゞらを、えもいはず
木戸・逆茂木・石弓などいふことどもしたゝめらる。さりともたやすくは

破れじと頼ませ給へるに、うしろの山より御敵どもくづれ参りて木戸ど
も焼き拂ひ、おはしますあたり近く既に煙もかゝりければ、今はいかゞせ
むにて、あやしき御姿にやつれてたどり出でさせ給ふ。座主の法親王御
手を引き奉り給へるもいとはかなげなる御有様なり。(増鏡)

〔註〕

○座主の法親王 天台座主尊澄法親王

〔要語〕

○いみじう

○つゞらををり

○したゝめ

○やつれ

○はかなげなる

一一四 全文通釋。

つぎさまの人はあからさまにたち出でもけふありつることとて息も
つきあへず語り興するぞかしよき人の物語するは人あまたあれど一人
に向きていふをおのづから人も聞くにこそあれよからぬ人は誰ともな
くあまたの中にうち出でて見ることのやうに語りなせば皆同じく笑ひ

の、しるいとらうがはし。(徒然草)

〔要語〕 ○つぎさま ○あからさま ○よき人 ○の、しる ○らうがはし

一一五 全文通釋。

齡の賀に大和唐土くさくさの歌をひろくこひもとめて集むること今の世に人の多くすることなりみやびわざとはいへどさる心もなきものみだりにふくつきてもものしてたゞ數多く集れるをたけきことにするはなか／＼にこちなくぞおぼゆる (玉かつま)

〔要語〕 ○くさくさ ○みやびわざ ○ふくつき ○ものして ○たけき ○なか／＼に ○こちなく

一一六 部分解釋。

藐姑射の山の峰の松もやう／＼枝を連ねて千代に八千代を重ね霞の洞の御すまひ、幾春を経ても、空行く月日の限り知らず長閑(三)けくおはしましぬべかりける世(四)をありありてよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのが散り散りにさすらへ、磯の苫屋に軒を並べて、おのづから言問ふものとは、浦に釣する蟹小舟、鹽焼く煙の靡く方をも、我がふる里のしるべかとはばかり眺め過させ給ふ御すまひどもは、(五)それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいていつをはてとかめぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の浪、煙の波の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御有様ども、(六)口惜しともおろかなり。(増鏡)

〔要語〕 ○藐姑射の山 ○霞の洞 ○ありありて ○よしなき一ふし ○言問ふ ○うしろめたさ ○まいて ○おろかなり

一一七 全文通釋。

なべての習ひとして、誰もく何やくれやと事しげくほだし多かる世にしあれば、奥まりたる山住もしがたく、海づらなどの景色よき所々をも、心に任せて見ありく事しがたければ、せばきまがきの中をだに、さるかたに見所あるさまに作りて、明暮の心をやるたよりともなしたらむは、わるかるべきことかは。(松屋文集)

〔要語〕 ○ほだし ○海づら ○まがき ○さるかた ○見所あるさま ○心をやる ○たより

一一八 全文通釋。

たとひかつがつ思ひ得る事の侍るも、古の賢き人のいひけむごとく、人の心の同じからぬは、其の面影のことなるにたぐふべければ、おのがよしとし侍らむすぢありとも、君はたうべなひ給はじ。また君が心ゆく方にお

ぼしとり給ふらむをも、かへりてはおちなき心にうけひくべうもあらぬことしもあれば、かゝるたぐひはおのがじ、その心々にまかせおきて、そのよしあしは、後のかしこききはの定めいはむを待つべきことにこそあなれ。(琴後集)

〔要語〕 ○かつがつ ○たぐふ ○はた ○うべなひ ○おちなき ○おのがじ

一一九 全文通釋。

千里をへだて侍れどこゝらの年月まのあたり語らひかはし侍る心地せらるゝまゝにうちつけなるものから立ちかへる春のほぎ言聞えはべりきみもわれもも、世をへつゝ、花鳥にあくやあかすやいざこゝろみむ (うけらが花)

〔要語〕 ○こゝら ○うちつけ ○ほぎ言 ○聞え

一一〇 全文通釋。

梅は白きうす紅梅ひとへなるがとく咲きたるもかさなりたる紅梅のほひめでたきもみなをかしておそき梅は櫻に咲きあひておぼえ劣りけおされて枝にしほみつきたる心うしひとへなるがまづ咲きて散りたるは心とくをかしとて京極入道中納言はなほ一重梅をなむ軒近く植ゑられたりける京極の屋の南むきに今も二もと侍るめり (徒然草)

〔要語〕 ○にほひ ○めでたき ○をかし ○おぼえ劣り ○けおされ ○心とく

一一一 部分解釋。

近衛院に譲りまし、後(一)も、藐姑射の山の玉の林をしめさせ給ひし(三)に思ひ(二)きや、麋鹿の通ふ路のみ見えてまうづる人もなき深山のおどろの下に、神

がくれ給はむとは萬乗の君にてわたらせ給ふさへ宿世(三)の業といふもの
の恐ろしくも添ひ奉りて、罪をのがれさせ給はざりしよと世のはかなきに思ひつゞけて涙わき出づるが如し。(雨月物語)

〔註〕 ○近衛院云々 崇徳上皇をいふ。

〔要語〕 ○藐姑射の山 ○しめさせ ○思ひきや ○おどろ ○宿世の業

一二二 全文通釋。

誰やの軒に泣きこゝゆるみどり子の、沫雪ふりかゝれるを見つけて、あたりの人よりつどひ、いかにくとはかり合する。あはれあはれ捨てし親は、いづちにかはひかくるゝ。すべなき世にありわびてこそかゝらめと、いききの人もうちひそみぬべし。(藤篋册子)

〔要語〕 ○みどり子 ○あはれく ○いづち ○すべなき ○ありわびて ○ひそみ

一一二三 全文通釋。

かぐてなほおはしませば、來し方はそこはかとなく霞み渡りて、あはれに遠くも來にけるかなと、日數にそへて都のいとゞ隔たり果つるも、心細う思さる。ほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山も重なるにそへてうつろひまさりつゝ、上り下るつゞらをりに、いと白く散り積りて、むら消えたる雪の心地す。

花の春また見むことのかたきかなおなじ道をば往きかへるともいと難しとは思すものから、なほさりとも平かにだにあらば、おのづから御本意遂ぐるやうもありなむなど、御心もて慰め思すもはかなし。(増鏡)

〔要語〕

○そこはかとなく

○いとゞ

○うつろひ

○つゞらをり

○ものから

○さりとも

○はかなし

一一二四 全文通釋。

多くのたくみの心をつくしてみがきたて唐の大和のめづらしくえならぬ調度どもならべおき前栽の草木まで心のまゝならずつくりなせるは見るめも苦しくいとわびしさてもやは長らへ住むべきまた時のまの煙ともなりなむとぞうち見るよりも思はるゝ大かたは家居にこそことざまは推しはからるれ (徒然草)

〔要語〕

○たくみ

○心をつくし

○えならぬ

○調度

○前栽

○わびし

○大かた

○ことざま

一一二五 全文通釋。

人は未だ聞き及ばぬことをわが知りたるまゝにさてもその人の事のあ

さましきなどばかりいひやりたればいかなる事のあるにかとおしかへし問ひやるこそ心づきなけれ世にふりぬる事もおのづから聞きもらすあたりもあればおぼつかかなからぬやうに告げやりたらむあしかるべきことかはかやうのことはもの馴れぬ人のあることなり。(徒然草)

〔要語〕

○あさましき

○心づきなけれ

○おぼつかかなからむやう

一二六

全文通釋。

大かたは知りたりともすゞろにいひちらすはさばかりの才にはあらぬにやと聞えおのづからあやまりもありぬべしさだかにもわきまへ知らずなどいひたるはなほまことに道のあるじともおほえぬべしまして知らぬこと知りかほにおとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かざるをさもあらずと思ひながら聞きあたるいとわびし (徒然草)

〔要語〕

○すゞろに

○道のあるじ

○おとなしく

○もどき

○わびし

一二七

全文通釋。

人の心を得るには誠をつくすにしくはなし。誠をつくすとは心のまこととをのみいふにはあらず。たとへばてびとは物をかたく作り、商人は値をかろく賣るたぐひも、皆世の人に誠をつくすなり。さるをおのが身はいたづかすして、かくして人の心をとらん、しかして人のおもひを得んとはかりごつより、なか／＼うとまれゆくぞ多かりける。(待問雜記)

〔要語〕

○てびと

○さるを

○いたづかす

○はかりごつ

○なか／＼

一二八

部分解釋。

昔壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば今の世の人の子は夢ゆめばか

りも身の上の事とは知らざりけりなみづぐきの岡の葛の葉かへすくも書きおける跡たしかなれどもかひなきものは親のいさめなり又賢王(三)の人を捨てたまはぬ政にももれ忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら又(四)さてしもあらでなほこの憂こそやる方なく悲しけれ (十六夜日記)

〔註〕 ○壁の中より云々 孝經をいふ。

〔要語〕 ○みづぐきの ○岡の葛の葉 ○思ひ知り ○さてしもあらで ○やる方なく

一二九 全文通釋。

頃はみ冬たつはじめのさだめなき空なれば降りみ降らずみ時雨もたえず嵐にきほふ木の葉さへ涙と共に亂れ散りつゝ事にふれて心細く悲しけれど人やりならぬ道なればいきうしとてもとゞまるべきにもあらで

何となく急ぎ立ちぬ (十六夜日記)

〔要語〕 ○降りみ降らずみ ○きほふ ○人やりならぬ ○いきうし

一三〇 全文通釋。

君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるがいまそのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたにまゐるとしては君のみはかしのしりへに従ひ、夕にまかるとしては君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何かことならむ。(琴後集)

〔要語〕 ○このかみ ○みはかし ○まかる ○うるはしみ ○はらから

一三一 全文通釋。

元より金張七葉のさかえを好まずたゞ陶潜五柳のすみかをもとむしかはあれども深山の奥の柴の庵までもしばらく思ひやすらふ程なれば愍ひに都のほとりに住まひつゝ人なみに世に經る道になん列れるこれ即ち身は朝市にありて心は隱遁にある謂れなり (東關紀行)

〔註〕

○金張 金日磾・張安世。 ○陶潜 「先生不_レ知_二何許人_一、亦不_レ詳_二其姓字_一。宅邊有_二五柳_一、因以爲_レ號。」(五柳先生傳)

○柴の庵云々 「いづくにも生まれずばたゞすまであらむ、柴の庵のしばしなる世に」(新古今集)

〔要語〕

○思ひやすらふ ○愍ひに

一三二 全文通釋。

手かくわざは、いにしへ物のまじるしに出で來はじまりたるなれば、よきあしきあげつらふべくもあらぬすぢなるものから、古びとの書けるあと

を見れば、心さへ清らにおぼゆるはいかなる故にかと思ふに、其の古びとのすなほなるまごゝろの、おのづからふみでにあらはるゝによりてなりけり。(うけらが花)

〔語語〕

○手かく ○まじるし ○あげつらふ ○すぢ ○ふみで

一三三 全文通釋。

すべて四つの時、花鳥の色香にそへてはかなき言の葉をのばへ、すゞろなる心を動かしたつべきものいと多かる中に、世をうらみては人の心の秋を悲しみ、うきを嘆きては中空に物を思ひ、遠つ人を慕ふとは玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへてはこの世を假とたどるも、折にふれ事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。(琴後集)

〔要語〕

○はかなき ○のばへ ○すゞろなる ○玉梓 ○たぐへ ○たどる

一三四 部分解釋。

おのが歌をしも自ら選びて世に残せるためし、古なきにしもあらねど、^(三)そ
もきはことなるあたり^(三)にこそさる事はあらめ。わがともがらのまねば
んはおほけなきわざなれば、思ひもかけざりしを、^(三)おのれすでに年たかく
なりにたれば、自らよく選びおきてよなど、^(四)やんごとなきかたぐよりね
もごろにそ、^(五)のかし給ふをいなみなんもなか〜にて、選び出でんこと
となりぬ。(うけらが花)

〔要語〕 ○きは ○まねばん ○おほけなき ○ねもごろに ○そのかし ○なか〜にて

一三五 全文通釋。

今やうの事どものめづらしきをいひひろめもてなすこそ、またうけられ

ね。世にことふりたるまで知らぬ人は、心にくし。今さらの人などある
時、こゝもとにいひつけたることぐさ、ものの名など、心得たるとちかたは
しいひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心しらぬ人にこゝろえず思はず
ること、世なれずよからぬ人の必ずあることなり。(徒然草)

〔要語〕 ○今やう ○もてなす ○ことふり ○心にくし ○今さらの人 ○こゝもと
○ことぐさ

一三六 全文通釋。

かのやんごとなききはの塵もすゑじとおきてたらんは春風の心もたど
らであながちに朝夕かき拂ひなどすめるが所につけては目やすきわざ
とも見ゆべけれどかへりては情おくる、かたやいかでなからん。(琴後集)

〔要語〕 ○やんごとなき ○きは ○おきて ○たどらで ○あながちに ○目やすき

一三七 全文通釋。

こゝに紅の梅をうゑて、年のはに梅の盛りには、みやびをのこどもをつどへて、その花めづる人なむありける。今年きさらぎ半ば過ぐる頃、いざといふまゝにかの宿りをとふに、ひろらかなるつぼの中に一本立てるが、高き屋の軒のつままでおひのぼりて、其の枝はしみゝにひろごり、その花はをゝりにをゝり、思ふことなげに咲きみちつゝ、おばしまによりゐる人々の面わにてり、衣手にくゆりかゝれり。(うけらが花)

〔要語〕

- 年のはに
- つどへ
- きさらぎ
- つぼ
- つま
- しみゝ
- をゝり
- おばしま
- 面わ
- くゆり

一三八 全文通釋。

この千五百番の歌合の時、院の上宣ふやう「こたみは皆世にゆりたる古き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへてまろが面おこすばかりよき歌つかうまつれ。」と仰せらるゝに、おもて打赤めて涙ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきのほどもあはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとりくゝなる中に、

うすく濃き野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ
草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけるほどを推し
はかりたる心ばへなど、まだしからむ人はいと思ひ寄りがたくや。(増鏡)

〔註〕 ○院の上 後鳥羽上皇。

〔要語〕

- まだしかる
- けしうはあらず
- かまへて
- まろ
- 面おこす
- すき
- とりくゝ
- 心ばへ

一三九 全文通釋。

世にかゝづらふこともなき身にし侍れば一日二日はなほこゝにありて
高ねの秋のほひをも心靜かにこそたづね侍らめといへばうたてさは
なのたまひそ山の名のあらしはたゞ時の間もうしろめたきをあへなく
夜の錦になしはて侍らば、いかにくちをしからましいざたまへとて伴な
ひ出づ (琴後集)

- 〔要語〕 ○かゝづらふ ○にほひ ○うたて ○なのたまひそ ○うしろめたきを ○あへなく
- 夜の錦 ○いざたまへ

一四〇 部分解釋。

海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしきさまに取拂ひて
おはしましどころに定む。今はさはかくてあるべき御身ぞかしと思し

靜まるほど、なほ夢のこゝちして、いはむ方なし。そこらまありしつはも
のどももまかづれば、かいしめり長閑やかになりぬる、いとゞ心ぼそし。
昔こそ受領どもも、任のほど、その國をしたゞめ行ひしか、この頃は、たゞ名
ばかりにて、いづくにも守護といふものの、目代よりはおぞましきを据ゑ
たれば、武家のなびきにてのみ、おほやげさまのことは、よろづおろかにぞ
しける。(増鏡)

- 〔要語〕 ○海づら ○さは ○そこら ○まかづ ○かいしめり ○いとゞ ○受領
- したゞめ ○おぞましき ○おほやげ ○おろか

一四一 全文通釋。

かの島には、春來てもなほ浦風さえて浪荒く、渚の氷も解けがたき世のけ
しきに、いとゞ思しむすぼるゝこと盡きせず、かすかに心細き御住まひに

年さへ隔たりぬるよとあさましく思さる。さぶらふ人々も暫しこそあれ、いみじくくんじにたり。後のきさらぎの初つ方より、取分きて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數経て、さすがにいたう困じ給ひにけり。(増鏡)

〔要語〕

- さえ
- いとゞ
- 思しむすぼるゝ
- あさましく
- いみじく
- くんじ
- 密教
- 大殿ごもらぬ
- さすがに
- 困じ

一四二 全文通釋。

葉月長月は田舎の神祭多かり。今年はわきて二百十日二十日とて、おぞむ風のわづらひもなく、わせはとくに刈りはて、なかくておくてもつぎ／＼にあからむ垂穂の、心ゆく賑ひまさりて、古びたる太鼓はり改め、かうぬしの烏帽子装束さらに調じなどし、にひよねのもちひ新しぼりの御酒には

たもの干肴とり並べたる神供まゐり、あるは神樂のはうしのしどろなるを奏し、あるはすまひしてどよめくもあり。(閑田文草)

〔要語〕

- 葉月長月
- わきて
- おぞむ
- 心ゆく
- かうぬし
- ひよね
- もちひ
- はたもの
- はうし
- しどろ
- すまひ
- どよめく

一四三 全文通釋。

市に隠るとかいひけむ何がしがしわざはなほ好ましからねどさりとして又水草清しとかいふめる山の奥谷の底に跡たえはてんもさすがに心細くたゞ世の中のものむつかしうおぼゆるをり／＼はかなき本草につけて心をやるべからんすみかのさしも里遠からでしづけからんあたりをと常に思ひわたる (楳岡文集)

〔註〕

○市に隠る 「小隠隠三陵藪二大隠隠三朝市」(王康瑠)

〔要語〕 ○跡たえはてん ○さすがに ○むつかしう ○はかなき ○心をやる

一四四 全文通釋。

このおはします所は人離れ里遠き島の中なり海づらよりは少しひき入りて山かげにかたそへて大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて松の柱に葦葺ける廊などけしきばかり事をぎたりまことに柴の庵のたゞしばしとかりそめに見えたる御やどりなれどさるかたになまめかしくゆゑづきてしなさせ給へり (増鏡)

〔註〕 ○柴の庵「いづくにも住まればたゞすまであらん柴の庵のしばしなる世に」(新古今集)

〔要語〕 ○海づら ○かたそへ ○けしきばかり ○事そぎ ○さるかたに ○ゆゑづき

一四五 全文通釋。

權中納言公雄と聞ゆるは皇后宮の御せうとなり早うより故院いみじうらうたがらせ給ひて夜晝御傍さらずさぶらひて明暮つかうまつらせ給ひしかば限りある道にもおくらかし給へることを若き程にやる方なく悲しと思ひ入り給へり西の對の前なる紅梅のいとうつくしきを折りて具氏の宰相中將かの中納言に消息きこゆ

梅の花春は春にもあらぬ世をいつと知りてか咲きにほふらん

(増鏡)

〔註〕 ○故院 ○後嵯峨院

〔要語〕 ○聞ゆ ○せうと ○らうたがらせ給ひ ○限りある道 ○おくらかし給へる

○やる方なく

語句索引

(あ)

あいぎやう 九
 あかし 一〇
 あからさま 四九・六八・七八
 あがれる 一六
 あがれる世 三三
 秋さりくれば 三〇
 あきらめ 七三
 あくた 三三
 あくよなく 一六
 あげつらふ 九一
 あげまき 五三
 あさましく 五三・九八
 あさまじや 八六
 あだし 三〇
 あぢきなき 二九
 あて 一五
 あてに 一一

あてやか 五二
 あと 四七
 跡しら雲の 四四
 跡たえはてん 一〇〇
 あない 一四
 あながちに 五三・九三
 あながちにも 四
 あなづらはし 二七
 あなる 一五
 あはき 四四
 あはれ 七四
 あはれく 八三
 あはれなり 一九
 あはれむ 五二
 あへなく 六六
 海士のたく繩 三七
 あめる 一六
 あや 三五
 あやなき 三八

(い)

あら玉の 三八
 あらぬ 三二
 あらぬさま 三二
 あらまし 一〇
 ありありて 七一
 ありがたし 三九
 ありとある 三三
 ありなむ 五
 ありわびて 七二
 あるじ 八五
 藍よりも青し 一三
 あんなれ 七三
 あんめれ 一七
 いかで 四六
 いかで——てん 四九
 いきうし 九
 いざたまへ 九六

いさや 七四
いさり 五四
いさを 七三
いそぎ 三九・七一
いたう 六四
いたづかず 八七
いたつき 五五
いちじるき 五
いづち 八三
いでや 一一・二九・三八
絲竹 三七
いとど 三〇・三六・八四・九七・九八
いとなき 二一
いはへる 五四
いひしるふ 四
いへば更なり 七三
今さらの人 九三
いまそかり 二五
今やう 六七・九三
いみじ 四五
いみじう 七七・七七
いみじく 九八
妹なね 七〇

いもひ 九
いろふ 一四
(う)
浮雲の 三八
うけぱりて 六六
うけられね 一四
うし 六九
うしろめたかりつるに 二
うしろめたき 九六
うしろめたさ 七九
うしろめたなく 二八
うすき心 三二
うたて 九六
うたてある 二四
歌枕 七四
うちつけ 八一
うち見 四八・五三
うち見て 五
うつしみの 三四
うつし人 三九
うつろひ 二四・五〇・八四
うつろふ 一七

うとかり 二
うとき 七六
うひ立のけ 三三
うべなひ 八一
うべなへ 四一
うまや 三三
海づら 八〇・九六・一〇〇
うらぐはし 三〇
うるはしみ 八九
(え)
えならぬ 八五
えもいはず 七・六九
(お)
おきて 九三
おくらかし給へる 一〇一
おこたり 九
おしまづき 二〇
おぞましき 九七
おぞむ 九九
おだしく 九六
おぢなき 八一

おちる 一一・五〇
おとしめ 二七
おとづれ 六三
おとなしく 三四・八七
おどろ 八三
おのがじ 五四・八一
おひ風 六一
おふなく 一五
おぼえ劣り 八二
大かた 八五
おほけなき 九二
思しくんじ 六七
思しむすぼる 九八
おぼつかかなからむやう 九六
大殿ごもらぬ 九八
おほやけ 九七
おほらか 五三
面おこす 九五
思ひおこせ 三三
思ひきや 八三
思ひくたす 三三
思ひ知り 八八
思ひ給へ 七五

思ひつき 四三
思ひのどめて 八
思ひやすらふ 九〇
おもむき(趣) 八・二五
おもむける 五〇
おももち 二七
および 六
おろか 六・九七
おろかなり 七九
おろそげ 三九
(か)
か 六
が 三三
かいしめり 九七
かうぬし 九九
かうぶり 五一
かうづらひ 二
かうづらふ 九六
かくなべて 三三
かきかぞふ 三三
かきくらす 六四
かきけたれ 三八

限りある道 一〇一
かくれ 二八
かけず 三三
かしがまし 五九
かしこく 六九
霞の洞 七九
かたかど 六三
片下り 一六
かたこと 五三
かたそへ 一〇〇
かたち 九・三・五三
かたはらいたく 四三
かたほとり 一四
かたみに 四一
かちより 六一
かつがつ 八一
かつは 九
がてら 八
かどくしく 二九
かとよ 六七
かなし 七三
かなしうしける 七
かなしからむ 三三

かは 七
 かへさひ 六
 かまへて 二五・九五
 かも 二九
 からやう 四〇
 がり 六二

(き)

開ゆ 一〇二
 開え 二一・八一
 きささき 九四
 きは 九三・九三
 きほふ 八九

(く)

くさく 七六
 くさはひ 一・三四
 ぐし 六
 葛の葉の 三五
 くちさきらきゝたる 七五
 くんじ 六四・九八

(け)

けおさるゝ 三
 けおされ 三
 けおとり 五六
 けしうはあらず 九五
 けしき 二七
 けしきだち 五
 けしきばかり 一〇〇
 けたれ 六一
 けちめ 五・二七
 けに 七
 げにくしく 七
 げはひ 八
 けやけく 八・三〇
 けらく 二九
 けん 一〇

(こ)

公家 三三
 困じ 九八
 こゝもと 九三
 こゝら 八一
 心あらむ友 一九
 心おき 六

心劣りせらるゝ 九
 心苦しう 六七
 心苦しき 二九
 心ぐるし 七一
 心しらひ 一五
 心づきなく 三
 心づきなけれ 八六
 心づきなし 六一
 心とく 八三
 心とけぬ 二
 心にくき 四三
 心にくし 九三
 心のゆく 七三
 心ばへ 三九・九五
 心やり 七〇
 心ゆく 九九
 心をつくし 八五
 心をやり 一
 心をやる 八〇・一〇〇
 こぞ 七五
 こちたく 三〇・七一
 こちなく 七八
 ごと 二九

ことえり 六七
 ことぐさ 七四・九三
 ことざま 八五
 ことざまし 六一
 事そぎ 二四・一〇〇
 こととはむ 三三
 言問ふ 七九
 ことに出でて 三三
 詞の道 三三
 ことふり 九三
 ことほぎ 七五
 ことやう 七一
 ことわざ 五
 ことわり 三・四七
 このかみ 八九
 木の芽はる雨 三三

(さ)

さうざうしき 七三
 さえ 三三
 才おふ 四七
 才覺 六四
 さきのをり 三〇

さゝげ 五九
 さしぐまれ 二六
 さしたる 六一
 さすがに 五九・九八・一〇〇
 さて 六
 さてしもあらで 八八
 さとびたる 三三
 さは 九七
 さぶしや 七〇
 さへ 四・九八
 さへまし 一七
 さへられ 五
 さめ 二五
 さもいみじき 三
 さもある 五七
 更にもいはず 八
 さらぬ 六四
 さらぬ別れ 六
 さらげなく 一六
 さりともし 八四
 さるかた 八〇
 さるかたに 一〇〇
 さるは 二四

さるべき 一九・二五
 さるを 八七

(し)

じ 二六
 しか 三三
 しがな 一九
 したゝめ 六九・七七・九七
 しづがしわざ 五五
 しづ山がつ 六七
 しでの田長 六九
 しどろ 三六・九九
 しな 五・三三
 しなとの風 三三
 しみ 九四
 しめさせ 八三
 しも 一七
 下さま 五三
 しもよ 一八
 しら雲 三三
 しらせむ 四三
 しるく 六九
 しるべ 二・三三

(す)

ず 二六
 すき 九五
 宿世の業 八三
 すける 二四
 すさび 五四
 すさまじ 七一
 すさみ 五
 すみみ 四六
 すじろなる 六九
 すじろに 八七
 すぢ 一四・五・九一
 すべなき 八三
 すまひ 九九
 すみわび 四八
 ずらん 三〇
 受領 九七
 するすみ 三三
 隨身 七三
 せうと 一〇一

(せ)

せり 四四
 せち 四五
 せば 二五
 前裁 八五
 せんすべ 五三
 ぞかし 八
 そはかとなく 八四
 そこら 九七
 そゝのかし 九二
 そのかみ 四三
 たぐふ 八一
 たぐへ 九一
 たぐみ 八五
 たけき 七八
 立待 五八
 奉れ 一〇
 たどくしき 五
 たどらで 九三
 たどる 九一

(た)

だに 三
 たのめし人 二八
 たのめぬ 七二
 たはやすく 六八
 玉くしげ 三七
 玉梓 九
 玉とちり 五八
 給ひ 一〇
 給へらむ 七五
 たより 六〇
 たらちね 六八
 たらむ 一四
 たらめ 二五
 たれやし人 七五
 つかさ 五一
 つがひ 四三
 つかむ 六四
 つぎさま 七八
 つたなき 三七
 つまましき 五

(つ)

つばらをり 七七・八四
 つどへ 九四
 つべき 三〇
 つぼ 九四
 つま 九四
 爪くはる 七五
 つれ 一九・二六

(て)

てうず 三九
 調度 八五
 手かく 五九
 てびと 八七
 手ぶり 三三
 てん 八

(と)

とありし 二六
 とうで 一・五〇
 とろろ 五
 時を失へる 四七
 所せき 三六
 所せく 三三

とごまかうさまに 四
 年なみをわたり 三
 年のはに 六六・九四
 塗炭 五七
 とてもかくても 六五
 とばかり 三三
 とほじろく 五四
 とみ 六八
 とみに 二
 ともある時 七六
 とよ 七五
 どよめく 九九
 とり 九五
 とりはやす 四
 堵を安くし 五七

(な)

ないがしろ 四九
 なか 八七
 なか 二・三・五・二・二七・六・七八
 なか 九二
 ながめ 七三
 なくなりぬれば 二三

なげく 三五
 なごき 三五
 な 一六・四五
 名どころ 五六
 何くれ 一一
 何くれと 三九
 なのたまひそ 九六
 なのめ 三
 なべての 五一
 なほ 六六
 なまさかしき 六七
 怒ひに 九〇
 なむ 二
 なめれ 一四
 なも 二九
 なよびか 一一
 ならし 三七・三八
 習ひもてつけ 二九
 ならめや 一四
 ならんはて 二
 なり出で 三五
 なりはひ 二
 なりひさご 五九

(に)

にき 二四
にけむ 一六
にたる 二四
にほひ 八二・九六
にや 三

(ぬ)

ぬべき 二〇
ぬめり 二六

(ね)

ね 二二
ねもごろに 九三
ねんじ 三

(の)

のどやか 五
のしる 七六
のばへ 九
野分 七三

(は)

はうし 九
はえ 一六
菟姑射の山 七九・八三
はぐくみ 六三
はかなき 五・五二・六五・九一・一〇〇

はかなく 五八
はかなげなる 七
はかなし 八四
はかしくしき 六
はかりごつ 八七
はした 四
初めの老 二五
はた 一・一五・八一

はたもの 九
葉月長月 九
はて 四
侍れ 一〇
はや 七
はらから 二五・八九
はらくろからず 三
はれたる所 七三

(ひ)

ひがごと 三三・三八
ひがみ 六三
ひきつくるへる 七六
引きはへ 五
久方の 三
ひそみ 八三
ひたすら 五五
ひたぶるなる 五
ひたぶるならぬ 八九
ひたぶるならぬ道 六〇
ひとりごつ 一七
ひよね 九

(ふ)

ふくつき 七
ふし 二
浮屠氏のあと 三
不便 七三
ふみで 九
ふりはへ 一八・七五
降りみ降らずみ 八九

振分髪のうちなる子

ほい 六九
ほいなき 三三
ほいなけれ 四〇
ほぎ言 八
ほこらしげ 二四
ほこりか 二七
ほだし 三・八〇
ほとほと 五七
ほのかに 五九
木所の頬 六三

(ま)

まいて 七九
まうけ 元
まうのぼり 二
まがき 八〇
まかづ 九七
まかる 八九
まく 六二
まし 三

(ほ)

ましかば 二八
まじかる 二八
まじき 二七
まじるし 九
まだしかる 五
又なく 九
又の年 三
待ち出で 一
まねばん 九
まほし 九
まめだちて 六
まめやかなる 六
まめやかに 五
まもり 七
まれ 五八
まろ 五七・五九
まゐらする 二

(み)

見え知られ 二七
見えむ 九
みそぎ 四
みだりがはしう 三

みだりがはしく 一八
道のあるじ 八七
道のつら 二
みづがき 五
みづくきの 八八
密教 九八
見所あるさま 八〇
みとし 五
みどり子 八
みなかみ 三
みながら 七
みはかし 八
冥加 二
みやびか 三
みやびたり 四
みやびわざ 六
みよし野 三

(む)

むげに 三
むすび 五
むすぼほれ 二
むつかし 一・六・七一

むつかしう 一〇〇
 むつかしき 一八
 むつかしく 三二

(め)

めかり 二
 めでたき 八二
 めでたし 九
 めづる 四七
 目やすき 九三
 めり 一

(も)

もがな 一八
 藻鹽草 三六
 もたり 三〇
 望月 一九
 もちひ 三九・九
 もてあつかひぐさ 一四
 もてつけて 四
 もてなす 九三
 もどき 六九・八七
 ものから 四一・八四

ものして 七六
 ものす 八
 もよほされ 一九

(や)

や 五・六
 やう異にて 五三
 やうやう 三・五〇
 やうくくに 八
 やがて 三二・九・三三・六〇・六三
 やすくすなほ 七四
 やつれ 七
 やは 五
 大和冊子 七五
 山のは 五〇
 や 一九
 彌生 三三
 やる方なく 八八・一〇一
 やをら 四四
 やんどとなき 九三
 ゆかしく 二

(ゆ)

ゆかしけれ 一八
 ゆかしさ 六三
 ゆきかひぶみ 五
 ゆきとほり 六六
 夕つけゆく 六九
 ゆほびか 三九
 ゆゑづき 一〇〇

(よ)

よきさが 三
 よき人 七六・七八
 よこなまり 六七
 よしなき一ふし 七九
 よすが 五九
 世にあへる 四七
 よね 三九・四八
 世のおぼえ 七三
 よひとよ 三
 夜の錦 六六
 らうがはし 七六
 らうたがらせ給ひ 一〇二

(ら)

らめ 三〇
 らるゝ 九

(り)

りしに 二四

(わ)

わきて 五・九
 わざと 三
 わび顔 一七
 わびし 八五・八七
 わびしき 二七
 わびしく 一四
 わびずみ 七〇
 わりなき 三
 わりなけれ 四

居待 五八
 (を) 二

(を)

を 二
 をかし 一〇・一九・八二
 をかしく 五五・五七
 をかしげ 七
 岡の葛の葉 八八
 をこ 一七
 をこがまし 七
 をさく 五〇
 尾の上 一六
 尾花が袖 四八
 をり 九四

語句索引 終

昭和九年四月二十五日發行
印刷

著作權
所有

總括補充用
標準國文問題

編纂者

中等教育研究會

發行者

東京市神田區駿河臺三丁目一番地
目黑甚七

印刷者

東京市神田區小川町二丁目十二番地
西川喜右衛門

印刷所

東京市神田區小川町二丁目十二番地
秀工社

發行所

東京市神田區駿河臺三丁目一
新湯縣長岡市表町四丁目(本店)
新潟市古町通七番町(支店)

目黑書店

東京電話神田一〇五九番
振替東京二八〇九番

長岡電話長岡一八番
振替東京三六一九番

新潟電話新潟九〇三番
振替長野四〇九〇番

定價四十五錢

なるれ恐を験試學入 校學等高

！れこは習復總校學中 ！れこは備準驗受

の君諸てし當配を題問試入の校學各に之げ掲を題問本基
と準標を集題問のこは者驗受くら須・す全完を備準驗受
！よれらせ期を成養力實の真々綽裕餘し

中等教育研究會編纂

(四六判・スプ
リソング・装釘)

補總 充用括	英文和譯重要問題集	定價 送料	五 六錢
補總 充用括	幾何學重要問題集	定價 送料	五 六錢
補總 充用括	代數學重要問題集	定價 送料	五 六錢
補總 充用括	名著漢文問題選	定價 送料	五 六錢
補總 充用括	標準國文問題	定價 送料	四 五錢

これでみつちり準備して合格へ！！

發行所

東京市神田區駿河臺
振替口座東京二八〇九

目黒書店



355
227